
日本が魔界を侵略しにきました（魔界に日本列島が浮かんじゃった魔法モノ）

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本が魔界を侵略しにきました（魔界に日本列島が浮かんじゃった魔法モノ）

【Nコード】

N8924Z

【作者名】

やった

【あらすじ】

魔界を侵略しちゃう学園もの

拝啓、遠い外国にいらつしゃるお父さんお母さん。

俺は現在、外国なんかよりよっぽど遠いと思われる場所にいます。なんとというか、海は赤いですし、木々には顔がついてますし、空は紫色に霞んでいますし、気温も真夏を遥かに超えちゃってます。

「ははー、これは……夢……夢に違いない」

空を飛ぶドラゴンを仰ぎながら、頬をぐにーっと引っ張ってみる。

うん、痛い。痛いよ、すっごく痛いよ、ハハハ……。

「……………夢、じゃない。……………現実。アベルが、証明、したから」

ふと声の主の方へ振り向く。相変わらず、その銀髪の魔女——アベルは意味不明なことを途切れ途切れに言っていた。

「証明ってなに。っていうかあんた誰。ここどこ！」

ぶっくらばうに、涙目で訴える俺。アベルはそんな俺の気持ちなどまったく構いなしに、無表情を貼り付けてこう言った。

「アベルは、運命を証明した。だから、貴方が、現れた。あの——おかえりなさい」

「おう、ただいま。——じゃなくてえっ！」

つい普通のテンションで反射的にただいましちゃったが、全然ただいまではない。こんな森と海しかない殺風景な、どこともわからない腐臭立ち込めるくすんだ大地の上で、なんで俺は変な魔女と二人つきりなのか。

というか、本当に、ここはどこですか？

頭がボンと爆発しそうな俺を見つめながら、アベルが止めの一言を告げた。

「ようこそ、魔界へ、魔王様——アベルの、ダーリン」

……………え、なに。魔界……………ダーリン？

「うにゆう……」

本日、十二月十日の朝はどうしようもなく寒かった。

俺は変な声を発しながら布団を深く被り直し、ベッドの上で猫のように丸くなる。

登校時間？ 知ったこっちゃない。だって寒いもん。二時間目から行ければよしとします。うん、そういうことで、おやすみなさ——

「いつまで寝てんのよ、こんのバカッ！」

「あだあつ！？」

いきなり頭部に痛烈な衝撃が奔った。俺は頭を押さえながら、ぱりと上半身だけ起き上がる。視線を鋭くして、今まさに俺に攻撃を仕掛けてきた張本人を睨みつけた。

お隣に住んでらっしゃる、佐倉智恵理さくらちづるがふんと鼻を鳴らしながら、腕を組んだまま俺を見下ろしている。まったく、こいつときたらいつもいつも……。

「なにしゃがる、さくらんぼ！」

「なにつて、起こしにきたのよ。いつものことですよ」

「いい加減飽きるよ！ ほっとけよ！」

「だって、あんたのパパとママに頼まれたんだもん。仕方ないじゃん」

ふん、と彼女はそっぽを向いた。茶髪のポニーテールが、さらりと靡く。ツンツンしてなければ可愛いのに——と、俺は彼女の澄ました横顔を見ながらため息を吐いた。

そう、彼女——佐倉智恵理は、俺の両親に頼まれたとか何とかで、毎日世話を焼いてくるのだ。親父に抗議したいところだが、生憎両親は揃ってロンドンに出張している。

日本大好きな俺だけがこの国にとどまっているわけだが、まさかこうなるとは思わなかった。自由が満喫出来るはずが、このお隣さんに縛られっぱなしだ。

何が最悪って、隣に住んでるだけではなく、こいつと高校もクラスも同じってことだ。

俺こと真壁央護まかへおごは高校に通い出して二年目。にも関わらず、幼馴染の呪いにかけられているのか、中学のときからこいつとはずーっと同じクラスなのである。

「早く支度しなさいよ、央護。あたしまで遅刻するでしょ」

「先に行きやいいだろ!」

「う、うるさい! 仕方ないじゃん!」

顔を真つ赤にしながら智恵理は言った。紺色のブレザーによく映える赤さである。

そこでふと、俺は気付いた。

「……」

「な、なによ」

「いや、今気付いたんだけどさ」

「う、うん」

「お前ってよく見ると……」

「う……うん……」

「靴下左右違くな……?」

「なっ! えっ……あっ」

指摘した矢先、彼女は自分の足元に視線を移し、次の瞬間、顔をさらに真つ赤にして凄まじい速度でしゃがみ込んだ。

「み、見るなあーっ!」

「うさぎちゃんが好きなのか?」

「い、言うなあーっ!」

智恵理の靴下は片方は紺だったが、もう片方が小学生顔向けのウサギ柄だった。そう、智恵理はなんというか、うっかりさんだ。その上負けず嫌いだからタチが悪い。

「家に戻って履き直してこいよ。その間に、俺一人で登校するから!」

「~~~~!!」
「そ、そうはさせないわよ、私、このままいくもんっ

「！」

「あ、さいですか……」

「これは、その、そ、そう。今流行りの、サ、サイコメトラーなのよっ！」

「アシンメトリーな」

俺は突っ込みつつ立ち上がる。冗談はさておき、そろそろ着替えないと遅刻しそうだった。いや、まあ、全然遅刻してもいいんだけどね。けどもう目も覚めちゃったし。

「……って、あんた、また……またああっ！！」

「ん？」

智恵理がさらにさらに顔を真っ赤にしている。本当にさくらんぼのような赤さだった。

俺が不思議そうに彼女の顔を眺めていると、

「なんでパンツ、履いてないのよぉーっ！」

「クールビズンツ!？」

何故か、顔面殴られた。

*

「おー、おー、派手にやられてますねえ、魔王様」

登校後、教室に入って着席すると、見知ったアホ面に話しかけられた。

笠井風太。かさいふうた通称カサブタ。ぽっちゃり系リトルマーメイド紳士を名乗る、よくわからないポリシーを複数持つ変態である。

ちなみに俺は真壁央護という名前から、略して魔王様と呼ばれている。コイツ限定で。

「うむ。そこで問題だ、カサブタ。俺はどうしてこうなった？」

自らの腫れた顔面を指差しながら、俺はカサブタにクイズを出してみる。

彼は真剣に悩んだあと、閃いたように言った。

「わかった、朝、貴様を起こしにきた佐倉さんの足を舐めようと
して踏まれたんだ！」

「そんなわけないだろ！ 俺は変態か！？ じゃなくて、イチモツ
晒したら殴られたんだよ」

「さすが魔王様！ そっちの方が冷静に考えて変態だ！」

「……」

噓し立てるカサブタを無視して着席することにした。すると、続
いてガタンと誰かが俺の隣に座る。まあ、見なくてもわかる。智恵
理のヤツだ。

「おい、まだ怒ってんの？」

「……ふん」

行きの電車で、彼女は結局ずっとそっぽを向いていた。これだか
らタカビーな女は困る——などと思いながら、俺はどうでもよくな
って前を向く。

「姫に嫌われましたね、魔王様」

前方から、にやにやとこつちを嬉しそうに眺めるのはカサブタだ。
そう、ヤツは目障りなことにこの俺の前の席である。俺は口を一文
字に結んで左側に首を動かした。

右横は智恵理の席だが、左横は空席なのだ。そしてそこは窓際の
席でもある。

「……うん、いい天気」

開けた視界に、空が広がった。結局俺のベスト視点プレイスはこ
こである。

——空は見ていて飽きない。何故だか、そう思う。

が、それももう一人のバカによって遮られた。

「オーッホッホッホ！ 今日も素敵なアホ面引っさげてますね、真
壁央護！」

金色のツインテールが朝の陽光を反射する。すらりとしたモデル
のような身体つき——ではなく、彼女、二階堂^{にかいとつれな}怜奈はちんちくりん
だった。なんだかちょっとアホ可愛い。視界を遮られたのは不本意

だったが、とりあえずなでなでしてやることにした。

「よしよし」

「な、な、何をするですか！ や、やめるです！」

「やめないうす！」

きつぱりと言い放つ。が、急に後ろから殺気を感じて俺の手は突然停止する。

「……」

恐る恐る振り向いた。すると、そこには例によって何故だか鬼神のごとく怒りに染まった佐倉智恵理さんのお姿が。

「……教室で、騒がないでくれる」

「ふ、騒ぐ？ 違うぜさくらんぼ。俺はただ怜奈ちゃんを菩薩のような笑顔でなでなでし」

「きもいのよ！」

「あでゆん！」

遠心力が乗った彼女のバッグが、俺の後頭部に突き刺さるようにして命中する。

そうして俺は、朝から一瞬意識を失った。

＊

「あのアマ……マジでいつか攻略してやる！ 幼馴染ルートに挨拶込んでやる！」

場所は屋上。昼休みになったので、俺はカサブタと二人で食事をとっていた。

コロッケパンと焼きそばパン、そして牛乳。フェンスに背中を預けて腰かけながら、俺の中の王道メニューをゆっくりと順番に頬張っていく。うーん、デリシャス。

「そういうな。貴様だつてわかっているんだろう？ 佐倉姫は貴様のことが多分好きなんだ……悔しいがな……いや、悔しいっていうかちよつと本気で貴様を殺したいと思ったことも何度かあるけどな

……」

不穏なことを呟きながら、カサブタは四つ目のカレーパンを一口で飲みこむ。

カサブタはこれからも順調にぶくぶく太っていくのだろう。

「ないない。だって、昔、俺アイツにフラれてんだぜ？ 友達しか見られてないって」

「だから貴様も、友達として接しようって話か？ なにそれちょっと男前」

「え、何もじもししちゃってんの！？ 気持ち悪い！」

——このとき、確かにまだ空は青かった。

でも次の瞬間、空はもう赤くなっていた。

「気持ち悪い？ 違うね、魔王様。これは——恋」

カサブタの気持ち悪い一言で、俺の人生の第一幕が閉じられる。

「——え？」

気付けば俺は見知らぬ世界にいて。

「——アベル。アベルは、魔女。はじめ、まして」

気付けば、知らない魔女が目の前にいて。

「——ええ？」

有り得ない状況の中で、ただ呆然と立ち尽くすしか——なかった。

「ようこそ、魔界へ、魔王様——アベルの、ダーリン」

2

「——ぶはあっ！」

ああ、なんだ夢か……。俺は汗まみれになりながらも、ほっとした。

ここは十数年間ずっと使っている俺の部屋である。酷い夢だったが、所詮は夢。

大したことなんてない——気が少し病んでいたのだろう。そもそも、魔界なんてあるわけがないのだった。

「何時だ……？」

携帯を見る。午前七時四十分。——そろそろ智恵理がやってくる時間だ。

構わん、早く来い。今の俺はちよっぴり不安定、幼馴染の顔がみたい気分だった。

まあ、でもとりあえずよく考えたら寒い。俺はいったん布団の中で丸くなって——

「いつまで寝てんのよ、こんのバカッ！」

「あだあつ！？」

いきなり頭部に痛烈な衝撃が奔った。俺は頭を押さえながらがりと上半身だけ起き上がる。視線を鋭くして、今まさに俺に攻撃を仕掛けてきた張本人を睨みつけた。

案の定、それは智恵理だった。

「なにしやがる、さくらんぼ！」

「なにつて、起こしにきたのよ。いつものことですよ」

「いい加減飽きるよ！ ほっとけよ！」

「だつて、あんたのパパとママに頼まれたんだもん。仕方ないじゃん」

ふん、と彼女はそっぽを向いた。茶髪のポニーテールが、さらりと靡く。ツンツンしてなければ可愛いのに——と、俺は彼女の澄ました横顔を見ながらため息を吐いた。

……つて、あれ？ デジャヴ？

なんだか怖くなって携帯を開いてみる。するとそこには？ 十二月十日？と書いてあった。

——あれ。つまりは十二月十日自体が——あの日が全て夢だったってことか？

「早く支度しなさいよ、央護。あたしまで遅刻するでしょ」

「先に行きやいいだろ！」

「う、うるさい！ 仕方ないじゃん！」

顔を真っ赤にしながら智恵理は言った。紺色のブレザーによく映える赤さである。

そこでふと、俺は気付いた。

「……」

「な、なによ」

「いや、もしかしてなんだけどさ」

「う、うん」

「お前……」

「う……うん……」

「靴下左右違かったりしない……？」

「なっ！ えっ……あっ」

指摘した矢先、彼女は自分の足元に視線を移し、次の瞬間、顔をさらに真っ赤にして凄まじい速度でしゃがみ込んだ。

「な、なんで見ないでわかるのっ！？」

「もしか片方は、うさぎちゃんか？」

「だ、だからなんでっ！？ し、信じられない！」

信じられないのはこっちの方だ。

つまり——？あの夢が繰り返されている？。

俺は視線を落とし、智恵理の靴下を確認してみた。片方は紺だったが、もう片方が小学生顔向けのウサギ柄だった。まるっきり、夢と一緒にある。

「……今流行りの、サイコメトラーか？」

「そ、そう。そうよ、今流行りのサイコメトラーなのよっ！」

「アシンメトリーな」

俺は突っ込みつつ立ち上がる。——これは正夢、なのだろうか。

それとも俺は、未だに夢を見ているのだろうか？

「……って、あんた、また……またああっ！！」

「ん？」

智恵理がさらにさらに顔を真っ赤にしている。本当にさくらんぼ

のような赤さだった。

俺が不思議そうに彼女の顔を眺めていると、

「なんでパンツ、履いてないのよぉーっ！」

「クールビズンツ！？」

またしても、顔面殴られた。

*

「おー、おー、派手にやられてますねえ、魔王様」

登校後、教室に入って着席すると、見知ったアホ面に話しかけられた。

「うむ。実は智恵理の足を舐めようとして踏まれたんだ」

あえて話の振り方を変えてみる俺。いわゆる必死の抵抗ってやつだ。

夢にしたって、もう一度魔界に行く羽目になるのは真つ平だった。だってあそこ意味不明で怖いんだもん。だから、前回とは立ち回り方を変えよう——そう考えた。

「久しぶりに貴様を……殺したいと思ったよ……魔王よ……」

「じよ、冗談だって」

「だよね！ 彼女に踏まれるという俺の夢を踏みにじるような男じゃないよね！」

「……」

疲れたので、カサブタを無視して着席することにした。すると、続いてガタンと誰かが俺の隣に座る。まあ、見なくてもわかる。智恵理のヤツだ。

「おい、機嫌直せよ、智恵理」

「……ふん」

行きの電車でも、やっぱり彼女は結局ずっとそっぽを向いていた。ああ、気まずい。二度目だとむしろ辛い。この状況を誰かどうにかしてくれ。と、俺が正面を向き直すと、

「姫に嫌われましたね、魔王様」

前方から、にやにやとこつちを嬉しそうに眺めるカサブタの姿があった。うざいので左に視線を移す俺。相も変わらず、そこは窓の外が見える空席――

「……え？」

「デジャヴが終了する？」

そこから先は、記憶にない未知の領域だった。

いるはずのない者が、そこにいる。座っている。

ショートに整えられた銀色の髪。全てを見透かすような翡翠の瞳。雪のように真っ白な肌には染みの一つもなかった。

無表情を貼り付けた少女が、俺の席の左隣に座ったまま、ただただ俺のことを見ている。

――？魔界で出会った、魔女を名乗る少女？。

非現実的な存在が、普通に紺色のブレザーを着て、大人しく座っていた。

「お、お、おまつ！」

「ああ、ここにいたのね、日下部アベルさん！」

俺が立ち上がり、指を差して叫ぼうとした刹那、ガラリと教室の戸が開け放たれた。

必死で探したのよ、などと言いながら、眼鏡を光らせ、先生はその銀髪の少女の手を引いていった。

日下部アベルと呼ばれた少女は、引きずられるようにして教壇の前に立つ。

「さあ、自己紹介してね、転校生！」

「……」

皆の視線が、彼女に釘付けとなっていた。

魔界のときには？そんなこと？にまで気が回らなかったが、今は全神経で彼女を見ている。だから、今ならわかる。――彼女は、あまりにも美しい。

だが――これはいったい、どういうことなのか？

「日下部さん、名前とか趣味とか、ほら、あるでしょ？」

「……………趣味？」

キョトンとした顔で彼女は先生を見る。先生はぼんと手について、「そっか、海外生活が長いから趣味って言葉わからないよね。要は、好きなものよ。なにかない？　好きなもの」

「好き……………」

彼女——アベルは再び俺の方を見た。そうして彼女は、微かに微笑む。

「アベルは、ダーリン——真壁王護が、好き。アベルは——真壁王護の、嫁」

瞬間、文字通り天地が引っくり返った。

ほとんど反射神経のレベルで、右横からストレートナックルが飛んできたからである。

「——はっ！　ご、ごめん、びっくりして、つい！」

智恵理のそんな戯言を聞きながら、俺はまたしてもちよつと意識を失った。

*

「——どういうことだよ、これ！　あれは夢じゃなかったのか！？　」
昼休み。体育館裏までアベルの手を引きやってきた俺は、一気に詰め寄った。

休み時間はいろんな人間に囲まれていたせいで、上手く話が出来なかったが、それももう終わりである。とにかくここで、俺は真実を聞き出してやる——そう決めていた。

「……………夢、じゃない。現実」

「くっ、っ——かお前はどっからやってきた！？　魔界か！？」

顔を近づけて迫る。しかし彼女は、ふるふると首を横に振る。

「……………違う。？　ここが魔界？　ダーリンは？　カオスゲート？　を使用した。だから——魔界の孤島、ゼルモアが、日本へと、上書き

された」

「はあ？」

意味がわからない。なめるのもいい加減にしろ、とばかりにさらに凄んでみせた。

「つまり……ここは地球じゃない。魔界。そこに日本を——ダーリンが召喚した——そういう、感じ」

「ああ……話にならん……」

頭を抱えてため息を吐く。

ここは魔界？ 日本を俺が召喚した？ そんなの無茶苦茶すぎる。大体、空だつて青い。ドラゴンだつて飛んでないじゃないか。ここは、地球の日本だ。

「証拠……がある。日本に上書きされても、ここはまだ、魔界の領域。だから、大気に、デゾルが、満ちている」

「デゾ……？ なんだつて？」

「デゾル。魔力の源たる上位存在。デゾルを利用すれば、魔法が使える」

「魔法……？ はっ、そんなもん——」

「手をかざして。炎を掌にイメージしてみて」

「む……」

アベルが真剣に言うものだから、俺は釣られてしぶしぶ手をかざしてみせる。

「炎を、イメージ」

「ほ、炎を——うわちっ！？」

そこで、有り得ないことが起きた。

信じられないことに——俺の掌から複数の火球が飛び出し、激しく燃焼して一気に消滅、何事もなかったかのように霧散していったのだ。

「え、えっ、あれ、火傷——はしていないな。えっ、なにこれ」

「魔法。大気中のデゾルが、生命の意思を感じとり、媒体を通じて、想いを具現化する」

アベルは、唇の右端を僅かに釣り上げた。彼女なりのどや顔に違いない。

「……ね？」

だから言っただでしょ。とても言いたげである。

「ああ、わかった……ここは魔界だ。百歩、いや千歩譲ってもうこの際そう仮定しちゃうとしよう。ただその場合大きな疑問がある——
——どうしてこうなった」

そう、つまりまとめると、どうしてこうなった。

「？カオスゲート？」

「だから、なにそれ！俺そんなの知らないよ！」

「自らに關係する異世界を、まるごと呼び出す、魔王の力——ダーリンは、大魔王様が異世界を支配するために、ランダムに異世界へ撒いた、魔王の種。……本来は、ダーリンが三十三歳になったときに能力が覚醒し、地球を魔界で上書き、呑み込むはずだった」

よく分からないけどひたすらに不穩だった。

「えーっと」

「それが、逆になった。ダーリンが、魔界にきたため。逆にダーリンは、魔界を？日本？という国で、上書きしてしまった。つまり——
——？魔界を侵略した？。それが、現状」

「あの……」

話についていきませんごめんなさい。

「魔界にダーリンが……きてしまったのは、アベルが、証明してしまったから。アベルの運命の相手が、ダーリンであることを、証明してしまっただから。だから、因果律が逆転した。証明事象が即座に現実になり、本来、十六年後に出会はずだったアベルたちは、今出会ってしまった」

アベルはちよつとだけ嬉しそうだった。ねえ、だから、ついていけてないってば。

「その……」

「つまり、アベルは今、ダーリンの、お嫁さん。それは証明によっ

て定義された、絶対不変の最終解答。……嬉しい？」

「嬉しいというかいまいちわからない！」

もう涙目だった。この魔女とは会話が成立しない——ということがよくわかった。

「……………ダーリン」

「ああ？」

「……………大好き」

きゅっ、と彼女のか細い両腕で不意に抱きしめられる俺。

「なっ、ちょ……………」

「アベルのこと、きらい？」

「いや、その……………」

潤んだ翡翠の大きな瞳に吸い込まれそうになる。そうして、勝手に俺の口は動いていた。

「好き……………かな」

俺のアホオオオオッ！

「なにやってんだ魔王オオオオッ！」

俺が心の中で叫ぶと同時に、遙か上空より同じく叫び声が聞こえた。なんだ？　と思つて空を仰ぐと——そこには。

「え……………おい……………なに飛んでんの……………カサブタ……………」

カサブタが、空を飛んでいた。

「うはははは！　飛べねえ豚はただの豚！　しかし俺はカサブタ……………」

…ただの豚にあらず！　……………じゃねえ！　なにやってんだ魔王オオオッ！」

ズドンッ！　と鋭く突き刺さるように体育館裏の狭いスペースに着地を決めるカサブタ。何故かその顔は怒りに歪んでいた。

「え、っーか、なんで飛んでんの？」

「うつせえ！　っーか、なんで抱いてんの！」

俺の質問に対して質問をぶつけてくるカサブタ。その瞳は血走っていた。

「……………アベルは、ダーリンの嫁。抱きつくのは、アベルの、正当な

権利」

「な、なななな……ちくしょう、ちくしょう！ ふ、ふふふ、もう怒った、絶交だ魔王。俺は力に目覚めた……今の貴様なら……本気でやれる……！！」

もう何がなんだかわからん。けどとりあえず、豚に殺意を向けられているのはわかる。

「ねえ、なんでお前、飛べたの？ ねえ、俺も飛べるの？」

「うるせええええ！ リア充爆発しろッ！！」

——瞬間。

カサブタの掌が怪しく煌き、瞬く間に空間が——爆ぜ上がる。

「なっ」

文字通り、それは？爆発？だった。おそらくはデゾル——大気中に浮かぶ魔力の素を使い、彼は魔法を解き放ったのだろっ——？本当に危ないところだった？。

「う、あ、びつくりした……」

「——さすがだな、魔王」

半透明のバリア的な何かで包まれていた俺。脳裏にある防御のイメージが具現化したのかもしれない。なんにせよ、助かったのは間違いなかった。

「いや、おまつ、今マジで殺す気だったろ！」

「うむ！」

「ああ、さいですか……頭いてえ……」

清々しいくらい敵意丸出しの、元友人の姿がそこにあつた。

「その様子だと貴様も知っているようだが、学園で革命が起きたのだよ、魔王くん」

「革命？」

「？超能力革命？さ。知らなかったのか？ 二階堂さんが昼休みに、食堂でカレー用のスプーンを曲げて以降、学園は空前の超能力ブームさ。誰でも、念じるだけでありとあらゆる超能力が使えるってな。そして俺はどうやら——その中でも群を抜いて才能があるッ！」

再びふわりと浮かび上がるカサブタは得意げに腕を組んでいた。
高笑いを重ねながら、徐々に高度をあげていく。

「また会おう——魔王よ！ 次に会う時が貴様の命日だ！！ ブハハハハ——！」

完全に敵となった元友人を空に見送り、俺は手を振った。

はぁ、とため息を吐いた後、俺に抱きついたままのアベルの方を見る。

「なぁ、これ……もうずっと、こんな感じの世界なのか？」

「そう。デゾルは絶対に枯渴しない。ここは魔界。間違った奇跡に溢れた——どうしようもない、世界。だから、魔族は、力を持て余してぶつけあう。それしか、享楽を見いだせない。人類も——このままでは、やがて、そうなる、と思う」

「なるほど……力があれば、試したくなるってか。うーむ」

俺は唸った後、少しだけ引つかる。

「待て待て。魔族？ そういや、ここは魔界なんだよな。魔族は——いるのか？」

「ここに、いる」

はい、と小さく手を挙げるアベル。

「……ああ、うん。……他には？」

「この日本化した孤島には、アベルしかいない。それ以外の魔族は、日本に吞まれて消滅、しちゃったから」

「消滅で……もしかして、お前の家族も……？」

「アベルに家族はいない。魔族は子を為さない。孤独を信条とし、愛を否定するもの」

いや、抱きつきながら愛を否定するとか言われても。

「……じゃあ、つまり、お前以外、ここに魔族ってヤツはいないんだな？」

「そう。——日本には、いない」

アベルはこくりと頷く。——えっと、日本には……？

「もしかして、日本以外は——」

「そう。日本以外は、全て魔界の国で溢れてる。そもそも、ここは、ダーリンが知っている地球じゃない。地球にそっくりだけど、別次元の星——魔界。だから、一たび海を越えれば——」

「あ、こんなところにいたのね！？ 真壁くん、日下部さん！」

そこで話を遮られた。先生が、眼鏡を光らせながら走ってこちらまでやってきたのだ。

「これから、臨時で、ホームルームを始めるわよ……！！ 早く教室にきて！」

「いきなりなんだってんだよ、先生？」

「ニユースでやってたのよ！」

「だから、なにが？」

「世界の滅亡と超能力者の出現——そして、悪魔の降臨！」

——ああ、なるほど。そういうことか。

つまりは一たび日本の外に出てしまえば、そこには魔族さんがわんさかいらっしやると、さてはそういうわけですね？

……って、洒落にならんくない？

*

「日本の電波塔や衛星は無事なので、テレビやインターネットは通常通り動いています。携帯も使えます。ただ海外諸国はおそらく完全に消滅したため——それらに関するURLも全て消えてなくなりました。海外にサーバーがあるサイトにはもはやアクセス出来ません。事実上、今の日本は鎖国状態に等しいです」

先生は至って真面目な顔で、淡々と事実を語っていた。

「これからは、おそらく輸入や輸出といった概念もなくなります。日本の食料自給率は決して高くはありませんから、厳しい生活になる可能性があります。特に畜産や魚介類、小麦などは価格が数倍に跳ね上がる可能性があります——」

「そんなことはどうでもいいです、先生！ それより、悪魔は——」

日本も滅ぼすつもりなのですか!？」

二階堂怜奈が声を荒げると、とたんに教室がざわざわと煩くなった。

悪魔——ニュースでは日本以外の国がすべて滅んだ元凶——とされている。

何故日本だけが無事なのか？ 十秒後には日本も消滅しているのではないか？

そんな議論がネットで重ねられているのを、俺も携帯で確認済みだった。

——そして事実は、真逆だ。なんとなく程度にしかわかっていないが、アベル曰く、どうやら俺がようわからん力を使って日本を魔界に召喚してしまったらしい。

つまり、世界各国が滅んだわけではないのだ。日本がワープしちゃっただけなのだ。

そしてその責任は、認めくないが、どうやら俺にあるっぽい。

……まあ、ドンマイだよな？

「先生にも、わかりません……けど、日本には自衛隊がありますから大丈夫です！」

「核を持つた国が一瞬で消滅したのに、どうして大丈夫だなんて言えるんだよ！」

「そうだそうだ！」

「わ、わたし、もう帰る！」

「俺も帰る……!! このまま学校で死ぬのは嫌だ……!!」

ホームルームが、完全に裏目に出ってしまったようだ。生徒たちを混乱させないように、という趣旨だったのかもしれないが、結局煽ってしまっただけである。

「み、みんなあ……」

気がつけば、教室の中はがらりとしていた。

「俺も帰るよ。この力を磨き——悪魔すら殺す!!」

厨二病を全開にしながら、カサブタも窓から飛んで帰っていった

しまった。

そうして残ったのは、俺とアベル、智恵理と怜奈、そして先生だけだった。

「ああ、学級崩壊……しくしく」

「ドンマイ、先生。しゃあないよ、マジで世界の破滅一步手前かもしれないんし」

実際、日本の外から魔族って奴らが攻めてきたら、どうなるのか想像もつかないわけで。

つつても、両親が日本にいなかった俺にとって、日本オンリーなこの世界で守りたいものなんて特にないわけで。

しいていうなら、そこでツンツンしている幼馴染くらいか。

「お前は帰らないのか？ 智恵理」

「……私の家族、実は今海外旅行中——だったのよ。あんたんとこと違って、仕事とかじゃなくて、本当に——旅行だったの。明日帰ってくる——予定だったの。だから、帰っても……帰っても私は……
……うっ……ぐっ……」

「……智恵理」

「ごめん、ごめんね……パパと、ママが……いなくなって辛いのは……央護も一緒なのに……ごめん、本当に……ごめん……ね……」

智恵理は、椅子からガタンと崩れ落ち、そのまま俺に身体を預けてきた。

あまりにもか弱い、幼馴染の姿。

そして——その原因を作った、俺。

「う、うあああああ！ ご、ごめん、ごめんよ智恵理いいいつ……」

がばつと抱きしめてしまった。主に罪悪感で。っていうか本当にごめんなさい。智恵理の両親は間違いなく現実世界の方で生きてらっしゃいますが、そんなこと言ってもしょうがないよね。

というか、余裕こいてたけど俺ももしかしたら両親に一生会えな

いかもしれないわけで。

あれ、それって……結構辛くね……？

「う、うわあああつ！」

急に涙ちよちよぎれる俺。そんな俺の前に、毅然とした態度でとある少女が仁王立ち。

「男のクセになに泣いてるですか、脆弱野郎！　ちよ、なでるな、です！　な、泣きながらなでるのやめっ……やめてくださいよう……」

半ばやけくそで泣きながら怜奈を撫でる俺。すると怜奈まで何故か半べそになった。

「ああ、泣きたいのは私も同じ……このまま学級閉鎖になっても私の給料出るんでしょうね……？　嫌よ私、アルバイトするなんて嫌よおっ！　っていうか徴兵令とかガチで有り得そうで、もうニュー・スすら見たくない……」

先生はそう言いながら、教卓におでこをぶつけて伏せる。職務放棄もいいところだった。

そんな中、アベルがぼんと俺の肩に手を置き、呟く。

「………両親に会いたいなら、他の国も、召喚してしまえばいい」
「………え？」

「全ての国を海や大陸ごと一気に召喚してしまえば——魔界は完全になんて上書きされ、魔族もいなくなる。そうすれば、すべて安泰」

「な……そんなこと、できるのか？」

俺は顔をあげ、智恵理の身体を離し、アベルを見つめた。

「可能。ただし、大魔王様を先に消滅させる必要がある。大魔王様の力が、地球による魔界の上書きを食い止めているのが、現状。だから、大魔王様さえいなくなれば、魔界は地球へと為りかわる」

「そ、そんなことが……」

「大魔王様は、魔族の王にして魔界最強。けれど、ダーリンもまた、魔王の力を持つ一人。なにより、アベルによって運命を証明されている。だから——勝てる見込みは、ある」

アベルは俺の手を握りながら、彼女なりの力強さを込めて、無表情に言った。

「アベル……」

「逆に、そうしないと、あちらに滅ぼされる。結果的に、日本は魔界を、侵略したから。同族意識の薄い一般魔族はともかく、強欲な大魔王様は、ゼルモア島を日本から奪還するために、いずれは日本を滅ぼしにくる、はず」

その言葉で、結論が出た。

出来る、出来ないの話じゃない。

やらなきゃやられる——そういう話なのだ。

俺には取り返したいものがある。

そして、奪われたくないものがある。

故に、超誠に勝手ながら——俺こと真壁央護は。

「わかった——大魔王を倒そう。そして魔界を——潰すッ!」

ノリで、魔界を侵略することにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924z/>

日本が魔界を侵略しにきました（魔界に日本列島が浮かんじゃった魔法モノ）

2011年12月28日02時04分発行